向陽新聞

高知市塩屋崎町1-1-10
土佐中・高校新聞部
編集人　水田幹久子
発行人　福崎裕印刷
印刷　高知印刷

写真
TEL ㉖6758
大丸東入口前
高橋

授業料5,500円と決定！

これ以後の値上げが心配
原因は職員のベースアップ
学校側説明

▽……十二月二日づけのサンケイ新聞に、土佐中・高校の授業料が七百円値上がって、四千二百円と書いてあった。七百円と……△
▽……は今年度値上げ額四百円の約二倍。十二月七日には理事会が開かれ、授業料、建築協力金を合わせて五、五〇〇円と、実……△
▽……質的には千円の値上げが決定された。だがここで問題は「理事会の正式決定後、父兄・生徒に通達する」という校長の発……△
▽……言。つまり七日に理事会が行なわれたから、正式決定以前に新聞社に情報がもれた事になる。当然学校側の安易な態度が……△
▽……問題となろう。また、このような大幅な値上げに生徒の間では不満が多い。そのため高校生徒委員会が校長に三項目の要……△
▽……求を提出した。さらに一部生徒による反対運動も起っている。

まず十二月二日、振興会の役員会で授業料値上げ案が討議され可決された。その案では、値上げ額を六百・八百・千円の三つの段階に分けている。そして、続いて行なわれた七日の理事会で、正式決定があり、授業料が七百円、建築協力金が三百円の値上げと、確定された。

授業料の七百円という大幅値上げは学芸の八百円、土佐女子の七百円、高知・中央の五百円と他の私立校を見てもトップクラス。

七百円の大幅値上げの理由としての人事院勧告による職員給与のベースアップ②諸物価の高騰③台風一〇号による修理費の増大④新校舎へ移ってからの維持費の増大　生徒の間では不満が多い。「私の家のように貧しい家には、相当負担になる」「今でもブルジョア的傾向の土佐校を、校長は完全なブルジョア学校にするつもりか」「土佐校創立の目的は忘れられたのか」等と、激しい声が生徒から聞かれる。また、建築協力金の値上げについてである父兄は「学校債と建築協力金値上げなど父兄の肩はかりにかかっている。校長はもっと積極的に大口寄付を募ったり、私学振興財団などへの働きかけを行なわねばならない」と語った。

そのため高校生徒委員会は、校長に対し生徒に授業料（建築協力金を含む実質納入額）を公表すること②学校経営を公開すること③値上げ理由を明示することの三項目を提出した。これに対し校長は「学校経営の公開はしない。だが値上げと関ある経営内容は生徒に説明する。値上げ額は生徒に公表でなく通知する。その時期は理事会の正式決定以後になる」と語った。サンケイ新聞に理事会正式決定以前に値上げ記事が出たのは、学校側の情報のもれだと見られる。このような学校側の安易な態度は批難を集めるであろう。そして学校側の一方的な態度に父兄・生徒同志による〝授業料値上げ反対の署名運動〟起る。

生徒側の根本原因は〝授業料値上げ発に動いている。会のH君は「来年度の値上げは二年続きて、増額の幅も今年に比べ多い。また学校債の返済のため五万円の学校債が発行されたばかりなのに…。この五万円の学校債、来年春の新入生の父兄にも買ってもらうんだそうだ。これじゃ、小六生・中三生を息子に持つ父兄で「うちの息子を土佐へ」と思っていた方々には、まさにダブルパンチだ。世の良識ある父兄の方々は「こりゃァ、うちの息子を土佐へやるのは、ちと考えもんじゃよ」と思うのじゃないろうか。来春の入学試験を受験するのは、金の有り余った良家のぼっちゃん嬢ちゃんばかりになるんじゃないろうか…。

○…もっと悪いことには、教育上よろしくないということで、一学年二百四十人に減らされていた生徒数が、再び三百人に増員されるのだ。「収入をふやすためには、教育上多少の障害があっても生徒数をふやす」というところに、学校側の、あまりにも経営者的な、非教育者的な考え方が、はっきりあらわれているのではないか。やっぱり、世の良識ある父兄の方々はこう思うだろう。「こりゃァ、うちの息子を土佐へやるのは、ちと考えもんじゃよ」

○…以前の土佐校は、こんなじゃなかったと、先輩の方々から昔話を聞かされる。生徒数も少なくて、生徒同志・先生と生徒の結び付きが密接だった。人間的だった。授業料も、ただ同然だった。だから、家は貧しくても、本当に学習意欲に燃えた生徒が集まってきた。こうした先輩の方々の力によって現在の土佐校の伝統が築かれた。

○…在校生でもぼくのように、成績はあまり良くなくても、根がまじめな（？）生徒は、こんなふうに考えるのじゃないろうか。

○…これはぼくの、ただの空想じゃない。実際に、こんなような事を口に出して言う生徒もいるのだ。〝土佐校〟を特徴づけるような何か一他校生から「さすがは土佐校」と言われるだけの何かが、今の土佐校にあるだろうか。それがないから、〝土佐校〟を愛する気持ちも、わいてこないんじゃないか。

○…「授業料値上げ」「建築協力金値上げ」おまけに「学校債の発行」。これじゃァ、来年春の中学・高校受験生から土佐校が敬遠されるかもしれない。もしそうなれば、土佐校は〝坊ちゃん・嬢ちゃん〟のためだけの学校になってしまう。それこそ土佐校の将来はあやうい。それに、今の在校生の心の中からもすでに〝土佐校〟が姿を消しつつある。今度の「授業料値上げ」を機会に、今こそぼく達・嬢ちゃんは、目をしっかり開いて、よく見なくっちゃいけない。〝土佐校〟の今の姿を、そして〝土佐校〟の未来の姿を。

（M・I）

英語弁論大会
高橋君（1A）が第一位に

十一月八日に共済会館で行なわれた、毎日新聞社主催の英語弁論大会で、本校の高橋浩君（一A）が一位に、西森加代子さん（三B）が三位にそれぞれ入賞した。二人が出場した中学校の部は、題材を教科書に求めたもので、三十人余りの参加者があった。各自約五分の持ち時間をいかして、高橋君は〝Christmas〟を、また西森さんは「コーデリアの宝石」を暗誦したもの。高校の部には本校からの参加者はなかったが、聴衆の中には本校生の姿も見られたみごと一位を勝ち得た高橋君は「大勢の前での発表だったのでたいへんあがってしまった」

また、十月二十四日に清和中で開かれた女子中学生英語弁論大会にも鍋島弘子さん（三C）が出場し、十八名の参加者の中で二位に選ばれた。この弁論大会は、清和中の主催で毎年開かれており、女子だけの英語弁論大会という異色のもの。鍋島さんが暗誦したのは〝Why is the elphants nose long？〟だった。

おばさんの表情は暗い

主張
みんなで真の解決を
二つの問題めぐって

十二月七日の理事会で、授業料の値上げが正式に決定された。しかし、その間の学校側の生徒無視の態度には首をかしげさせるものがあった。十二月四日、校長は「授業料の値上げ額、またその理由について、生徒は何も知る必要はないし、またその権利もない」と述べた。が、これより前、十二月三日には、これと全く対立する意見が、生徒委員会において、大多数の支持を得ている。また一部では、授業料値上げ反対の運動も起こった。生徒委員会では、「生徒が授業料の値上げに関心をもつのは当然だ」といった意見のほか「特に、高校生の場合は、義務教育の期間でもなく、生徒の中にはアルバイトなどをして、家計を助けている者も少なくない」と、生徒の立場の再認識を促す発言も聞かれた。校長は、「授業料を負担するのは父兄なのだから、父兄に対し、正式に伝える」と述べたが、生徒の〝自立心〟〝独立心〟を育てることが置き去りにされてよいのだろうか。

「学校側を疑うのでは、もはや、教育は成り立たない」と校長は言い、授業料値上げ反対の運動を起こした生徒に対し、「学校側をそんなに疑うのであれば、ほかの学校に移ってもらわねばならん」と言っている。

我々は校長の発言の真意を問いたい。〝学校当局〟とは、それほどまでに絶対的なものなのだろうか。なぜ、生徒の疑問に何らかの形で答えてやらなかったかと思う残念でならない。信頼とは最初から無条件に存在するものとは思わない。「まだ、説明の時期ではない」として、生徒議長の生徒委員会招集案を却下する前に、今は授業料値上げの問題だけではなく校長の考え方自体が問われているのだということを考えてほしかった。生徒の中に値上げに同意する者がほとんどいないのであれば、行って説得してやろう、というくらいの誠意は見せてほしかった。

我々は〝教育〟の原点は、むしろ疑問符にあるのではないかと考える。人は、疑問符の積み重ねによって進んで来たのではないだろうか。「なぜ？」と問うことを許さない絶対的なものが存在する限り、人はいつまでも前に進めないのだ。

十二月八日に発表された高知県人が仕事中にすべって転倒し、指の骨を折った。このため、そのおばさんは長期欠勤し、食堂は十分な機能が発揮できなくなった。こうして食堂は一時閉鎖になり、再開された後も、その機能は従来の三分の一程度に落ちることとなった。学校側は、その結果、食堂にも食堂のおばさんに対し、公務員並みの給料が出ている。しかし、うちの食堂のおばさん達の給料には基準が設定されていない。一万円少しの給料と聞けば、生徒でなくても、「何だか少ないなあ」と思うだろう。職員会においても、食堂の給料の問題が、もうすぐ議題に上るという話があった。

だが、この問題に対しての校長の誠意はあまり見られない、と言ってよい。新聞部インタビューにおいても「食堂はさほど重要ではない」という考えを明らかにしている。また「食堂の給料が安いのは、売店などとのつり合いがあるからだ」と語っており、どうやら問題は食堂だけには終らないということらしいのだ。

いわゆる本職員でない人達にとって、この問題は非常に切実であると聞いた。一度、この人達がまとまって校長に団交に行ったが、「不満ならやめてもよい」という解答しか得られなかった。

我々はこのような校長の態度に失望せざるをえない。我々の求めるのはもっと温かい、〝人間的〟な校長である。〝天皇〟のような校長ではない。〝君主〟のような、そんな校長ではないのだ。確かに、本校の経営は、今、苦しいのかもしれない。しかし、組合もなく、立場も弱い人達に、最も大きなしわよせがくるのでは駄目だと思う。パンの数をふやしても、外食を認めても、それが問題の根本的な解決にはならないことは明白である。〝現象〟をだけ見て〝質〟の解決をはかろうとしても、それは無理である。

校長は、たとえば、公務員並みの給料にベース・アップするとかできるだけ早く、誠意を示してほしい。

最後に、「さぼらないで、ちゃんとやってくれ！」と、おばさん達をしかりつけに行った生徒のあったことを明記しておく。「なるだけ生徒には動揺を与えたくないから。自分達が我慢していればいいのだから」と言って、生徒には何も知らせなかったことが、おばさん達にとって〝あだ〟となってしまったわけだ。悲しいことだ。先の授業料値上げの問題と共に我々には、事実を知る〝権利〟と同時に、知る〝義務〟もあるのではないか、ということを考えていきたい。

食堂の休業
賃金は一万円ちょっと
根本原因　おばさんの待遇に問題

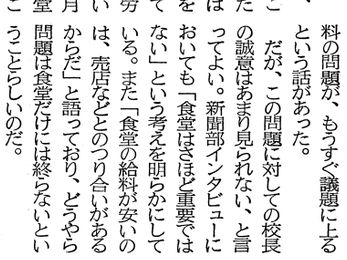
二学期半ばから閉鎖されていた食堂は、再開はされたものの従来の三分の二以下の販売量のまま冬休みを迎える事になった。食堂をめぐる一連の動きを追うと次のようになる。

▽十月十六日……食堂のおばさんが仕事中にぬれた床ですべって転び、指を折る。

▽十月七日……食堂臨時休業となる。まもなく食堂でもパンを販売、外食が許可される。

▽十一月二十日……おばさん一人欠勤のまま食堂再開。販売量はもとの約四分の一の二百杯。

▽十二月六日……指定食堂での外食が禁止され、うどんは二百五十杯となる。



温かい義援金

〝東パキスタンを救おう〟
善意の十万円集まる

十一月十三日の台風で史上最高の死者を出し、大きな被害を受けた東パキスタンを救おうと、校内で義援金を集めていた中学執行部は十一月二十三日から二十九日まで一週間の間、街頭募金を行なった。この募金で五万八千五百円が集まり、校内で集めた一万二千六百円と合わせて七万円余りを十一月三十日、日赤病院へ贈った。

今度の募金は西村厚子さん（三C）ほか四人の執行部員が中心となって、三〇人以上の生徒の協力で行なわれたもの。寒い北風の吹く中、はりまや橋交差点付近などで道行く人にさかんに呼びかけた。

西村さんは「校内で集めただけでは足りないと思い、街頭募金を始めました。はじめははずかしいので声も出ませんでしたが、千円を入れてくれる人もいてうれしかった」と言っている。

執行部とは別に岡林健二君（一S）も同志三人とともに街頭募金を行なった。同君は帯屋町アーケードで十一月二十二日と二十九日の二日間に十二万円余りを集め、高知新聞社へ贈った。「テレビで東パキスタンの様子を見て　人がやらないなら自分が…と思い、丁度、同志の友人もいたので…」という岡林君である。

〝いくらあるかな〟

「三学期も続けたい」
第三回協議会開かれる

去る十二月二日、二日において第三回協議会が開かれた。

その日は生徒会のほか約二十五人の生徒が集まった。しかし先生の参加はわずか三人しかなかった。それでも文化祭、授業料値上げについて種々の意見が出された。しかし質疑応答の形式となって先生と生徒の対立が浮きぼり。一部では、先生と生徒の相互理解を期待していたが、あてはずれだった。という声も出ている。

この会を主催した矢野生徒会長は、「最初の主旨（生徒の意見を具体化させ、実現させるための潤滑油的な役わりを果たす）とはやや異なるが、僕は話し合いによって先生と生徒の断絶がなくなればそれでよいと思う。今回は先生方も少なくてやりづらかった。来学期もこの会を続け、協議会を生徒の身近な会にしていきたい」と言っている。

……これが、父兄・生徒の学校に対する不信感を盛り上げる原因になるのかもしれない。

12月２日の協議会風景

生徒側
「値上げ反対」の署名運動起る

生徒同志による〝授業料値上げに反対する会〟が反対運動を起こしている。今まで会合、会報、署名運動、校長インタビューなど活発に動いている。会のH君は「来年度の値上げは二年続きて、増額の幅も今年に比べ多い。また学校債の返済のため五万円の学校債が発行されたばかりなのに…。この五万円の学校債、来年春の新入生の父兄にも買ってもらうんだそうだ。これじゃ、小六生・中三生を息子に持つ父兄で「うちの息子を土佐へ」と思っていた方々には、まさにダブルパンチだ。世の良識ある父兄の方々は「こりゃァ、うちの息子を土佐へやるのは、ちと考えもんじゃよ」と思うのじゃないろうか。来春の入学試験を受験するのは、金の有り余った良家のぼっちゃん嬢ちゃんばかりになるんじゃないろうか…。

○…もっと悪いことには、教育上よろしくないということで、一学年二百四十人に減らされていた生徒数が、再び三百人に増員されるのだ。「収入をふやすためには、教育上多少の障害があっても生徒数をふやす」というところに、学校側の、あまりにも経営者的な、非教育者的な考え方が、はっきりあらわれているのではないか。やっぱり、世の良識ある父兄の方々はこう思うだろう。「こりゃァ、うちの息子を土佐へやるのは、ちと考えもんじゃよ」

○…以前の土佐校は、こんなじゃなかったと、先輩の方々から昔話を聞かされる。生徒数も少なくて、生徒同志・先生と生徒の結び付きが密接だった。人間的だった。授業料も、ただ同然だった。だから、家は貧しくても、本当に学習意欲に燃えた生徒が集まってきた。こうした先輩の方々の力によって現在の土佐校の伝統が築かれた。

○…在校生でもぼくのように、成績はあまり良くなくても、根がまじめな（？）生徒は、こんなふうに考えるのじゃないろうか。

○…これはぼくの、ただの空想じゃない。実際に、こんなような事を口に出して言う生徒もいるのだ。〝土佐校〟を特徴づけるような何か一他校生から「さすがは土佐校」と言われるだけの何かが、今の土佐校にあるだろうか。それがないから、〝土佐校〟を愛する気持ちも、わいてこないんじゃないか。

○…「授業料値上げ」「建築協力金値上げ」おまけに「学校債の発行」。これじゃァ、来年春の中学・高校受験生から土佐校が敬遠されるかもしれない。もしそうなれば、土佐校は〝坊ちゃん・嬢ちゃん〟のためだけの学校になってしまう。それこそ土佐校の将来はあやうい。それに、今の在校生の心の中からもすでに〝土佐校〟が姿を消しつつある。今度の「授業料値上げ」を機会に、今こそぼく達は、目をしっかり開いて、よく見なくっちゃいけない。〝土佐校〟の今の姿を、そして〝土佐校〟の未来の姿を。

（M・I）

ひとこと
〝土佐校〟の終末

「そう頭がえいわけでもないのに、高い授業料で親に無理をさせるのは不当だと思う」と言っているのは高三の人達。今が受験勉強も天王山といったところだろう。ペースをくずさずとにかく健康には充分注意して目標に向って下さい▼朝の起床。寝床に未練を残し、制限時間まで待ったをし、粘り切ったあげく、ついには洗面なし、朝食ぬきで快足自転車にとび乗り赤鼻のトナカイになりながら、ワッセワッセと通学の今日この頃。ジーンとオヘソにまでしみる朝の寒さで、遅刻者が増加する師走。ところがここに、こんな寒さを一辺に吹き飛ばして、毎朝七時五十分からの三十分間ほどを、本校のすぐ南の児童公園の清掃に精出しているグループがある。二Sの中村君を中心とした「ハマグリの会」がそれだ。この会は、今夏休み、ワークキャンプという奉仕活動に参加した人達で結成されたグループで、これまでに福祉施設を慰問したり、又現在では目の不自由な人達のために朗読奉仕をしたりしている。清掃は十一月から始めたもので、ある会員は「朝のこの時間を、何となく過ごすんでなくこういう事に使うとやっぱり張りがある」と言っている▼時は前後するが先に台風で大被害を被った東パキスタンの人達を救おうと二Sの岡林君を中心とし追手前高校生一人を含む四人が十一月二十日と十一月二十九日に、帯屋町アーケードで義援金集めをした。その結果十万九千円のお金が集まり、早速これを高知新聞社に届けた。又中学の執行部も同じく義援金を集めた。これら一連の行為は、いずれも自然に無償に働きかけたものでありその態度は、当然のことながら貴重な価値を持っている▼今年は、夏休み前、五十年目の墜落とも言うべき行為がひん発し改めてその根源を問われた。十月には先生方の分科会も結成され、新たに土佐校教育を探る機会を持った。諸々の出来事があった一九七〇年だったが、彼らの行為はその中にあって清涼剤のようである▼後少しで今年も終る。今一度今年をじっくりと振り返ってみたい。（H・O）

授業料の値上げ
食堂の休業

十二月七日の理事会で、授業料の値上げが正式に決定された。しかし、その間の学校側の生徒無視の態度には首をかしげさせるものがあった。十二月四日、校長は「授業料の値上げ額、またその理由について、生徒は何も知る必要はないし、またその権利もない」と述べた。が、これより前、十二月三日には、これと全く対立する意見が、生徒委員会において、大多数の支持を得ている。また一部では、授業料値上げ反対の運動も起こった。生徒委員会では、「生徒が授業料の値上げに関心をもつのは当然だ」といった意見のほか「特に、高校生の場合は、義務教育の期間でもなく、生徒の中にはアルバイトなどをして、家計を助けている者も少なくない」と、生徒の立場の再認識を促す発言も聞かれた。校長は、「授業料を負担するのは父兄なのだから、父兄に対し、正式に伝える」と述べたが、生徒の〝自立心〟〝独立心〟を育てることが置き去りにされてよいのだろうか。

「学校側を疑うのでは、もはや、教育は成り立たない」と校長は言い、授業料値上げ反対の運動を起こした生徒に対し、「学校側をそんなに疑うのであれば、ほかの学校に移ってもらわねばならん」と言っている。

我々は校長の発言の真意を問いたい。〝学校当局〟とは、それほどまでに絶対的なものなのだろうか。なぜ、生徒の疑問に何らかの形で答えてやらなかったかと思う残念でならない。信頼とは最初から無条件に存在するものとは思わない。「まだ、説明の時期ではない」として、生徒議長の生徒委員会招集案を却下する前に、今は授業料値上げの問題だけではなく校長の考え方自体が問われているのだということを考えてほしかった。生徒の中に値上げに同意する者がほとんどいないのであれば、行って説得してやろう、というくらいの誠意は見せてほしかった。

我々は〝教育〟の原点は、むしろ疑問符にあるのではないかと考える。人は、疑問符の積み重ねによって進んで来たのではないだろうか。「なぜ？」と問うことを許さない絶対的なものが存在する限り、人はいつまでも前に進めないのだ。

十二月八日に発表された高知県人が仕事中にすべって転倒し、指の骨を折った。このため、そのおばさんは長期欠勤し、食堂は十分な機能が発揮できなくなった。こうして食堂は一時閉鎖になり、再開された後も、その機能は従来の三分の一程度に落ちることとなった。学校側は、その結果、食堂にも食堂のおばさんに対し、公務員並みの給料が出ている。しかし、うちの食堂のおばさん達の給料には基準が設定されていない。一万円少しの給料と聞けば、生徒でなくても、「何だか少ないなあ」と思うだろう。職員会においても、食堂の給料の問題が、もうすぐ議題に上るという話があった。

だが、この問題に対しての校長の誠意はあまり見られない、と言ってよい。新聞部インタビューにおいても「食堂はさほど重要ではない」という考えを明らかにしている。また「食堂の給料が安いのは、売店などとのつり合いがあるからだ」と語っており、どうやら問題は食堂だけには終らないということらしいのだ。

いわゆる本職員でない人達にとって、この問題は非常に切実であると聞いた。一度、この人達がまとまって校長に団交に行ったが、「不満ならやめてもよい」という解答しか得られなかった。

我々はこのような校長の態度に失望せざるをえない。我々の求めるのはもっと温かい、〝人間的〟な校長である。〝天皇〟のような校長ではない。〝君主〟のような、そんな校長ではないのだ。確かに、本校の経営は、今、苦しいのかもしれない。しかし、組合もなく、立場も弱い人達に、最も大きなしわよせがくるのでは駄目だと思う。パンの数をふやしても、外食を認めても、それが問題の根本的な解決にはならないことは明白である。〝現象〟をだけ見て〝質〟の解決をはかろうとしても、それは無理である。

校長は、たとえば、公務員並みの給料にベース・アップするとかできるだけ早く、誠意を示してほしい。

最後に、「さぼらないで、ちゃんとやってくれ！」と、おばさん達をしかりつけに行った生徒のあったことを明記しておく。「なるだけ生徒には動揺を与えたくないから。自分達が我慢していればいいのだから」と言って、生徒には何も知らせなかったことが、おばさん達にとって〝あだ〟となってしまったわけだ。悲しいことだ。先の授業料値上げの問題と共に我々には、事実を知る〝権利〟と同時に、知る〝義務〟もあるのではないか、ということを考えていきたい。

食堂の休業
賃金は一万円ちょっと
根本原因　おばさんの待遇に問題

二学期半ばから閉鎖されていた食堂は、再開はされたものの従来の三分の二以下の販売量のまま冬休みを迎える事になった。食堂をめぐる一連の動きを追うと次のようになる。

▽十月十六日……食堂のおばさんが仕事中にぬれた床ですべって転び、指を折る。

▽十月七日……食堂臨時休業となる。まもなく食堂でもパンを販売、外食が許可される。

▽十一月二十日……おばさん一人欠勤のまま食堂再開。販売量はもとの約四分の一の二百杯。

▽十二月六日……指定食堂での外食が禁止され、うどんは二百五十杯となる。

〝東パキスタンを救おう〟
善意の十万円集まる

十一月十三日の台風で史上最高の死者を出し、大きな被害を受けた東パキスタンを救おうと、校内で義援金を集めていた中学執行部は十一月二十三日から二十九日まで一週間の間、街頭募金を行なった。この募金で五万八千五百円が集まり、校内で集めた一万二千六百円と合わせて七万円余りを十一月三十日、日赤病院へ贈った。

今度の募金は西村厚子さん（三C）ほか四人の執行部員が中心となって、三〇人以上の生徒の協力で行なわれたもの。寒い北風の吹く中、はりまや橋交差点付近などで道行く人にさかんに呼びかけた。

西村さんは「校内で集めただけでは足りないと思い、街頭募金を始めました。はじめははずかしいので声も出ませんでしたが、千円を入れてくれる人もいてうれしかった」と言っている。

執行部とは別に岡林健二君（一S）も同志三人とともに街頭募金を行なった。同君は帯屋町アーケードで十一月二十二日と二十九日の二日間に十二万円余りを集め、高知新聞社へ贈った。「テレビで東パキスタンの様子を見て　人がやらないなら自分が…と思い、丁度、同志の友人もいたので…」という岡林君である。

〝いくらあるかな〟

「教師達は頼りない」
「声」に関連記事

ガウス会が数学を研究
山下君ら

現在高二の数学は、休職した竹村先生に代わって校長先生が担当している。学校側としては、万全の策をとっているのだろうが、生徒の一部には、そうは受け取られていないようだ。その典形的な例にKホームを中心にして結成されていた「ガウス会」がある。

同会は、数学を研究するという目的でつくられたもので、十八名の会員を有し、「ガウス会と聞けば教師も黙る」と自称、自信の程をのぞかせている。活動の内容は、週に四問の問題が出され、うち二問を選択して解き、同時に一問以上の問題を創作している。

会員達は、「未認可クラブなので、全額個人負担だから苦しい、顧問がいない」と、ぼやきながらも、「試験のためにしていたような勉強を、自分が楽しんでやる。こういうことに、意味があると思う」と、満足しているようす。

あでやかな赤に
女子の冬のトレパン

十一月の末頃から女子の体操の服装が変わった。以前のおとなしい純白（？）から、活動的な赤いトレパン、なかなかあでやかなスタイル。しかし高二から「買っても使う期間が短い。上着と色が違う」など反対の声が出、新しいトレパンは中一から高一までが使用することになった。

体育担当の竹田先生は「機能的に見ても前のものより良い。また県下では、すでに、綿のトレパンを使っているのは本校だけになったので、思い切って変えることにした」と言っている。新しいトレパンは下級生にはなかなか好評のようす。

▼師走もはや文字通り、駆け足で過ぎ去ろうとしている。本校の新築工事現場では、八月着工以来順調に工事が進展しているようで、最近ぐっと校舎らしくなってきた。寒中、作業に従業員の人達がもくもくと取り組んでいる姿は、実に気持ちがいい。一方これ又もくもくと受験勉強に取り組んでいるのは高三の人達。今が受験勉強も天王山といったところだろう。ペースをくずさずとにかく健康には充分注意して目標に向って下さい▼朝の起床。寝床に未練を残し、制限時間まで待ったをし、粘り切ったあげく、ついには洗面なし、朝食ぬきで快足自転車にとび乗り赤鼻のトナカイになりながら、ワッセワッセと通学の今日この頃。ジーンとオヘソにまでしみる朝の寒さで、遅刻者が増加する師走。ところがここに、こんな寒さを一辺に吹き飛ばして、毎朝七時五十分からの三十分間ほどを、本校のすぐ南の児童公園の清掃に精出しているグループがある。二Sの中村君を中心とした「ハマグリの会」がそれだ。この会は、今夏休み、ワークキャンプという奉仕活動に参加した人達で結成されたグループで、これまでに福祉施設を慰問したり、又現在では目の不自由な人達のために朗読奉仕をしたりしている。清掃は十一月から始めたもので、ある会員は「朝のこの時間を、何となく過ごすんでなくこういう事に使うとやっぱり張りがある」と言っている▼時は前後するが先に台風で大被害を被った東パキスタンの人達を救おうと二Sの岡林君を中心とし追手前高校生一人を含む四人が十一月二十日と十一月二十九日に、帯屋町アーケードで義援金集めをした。その結果十万九千円のお金が集まり、早速これを高知新聞社に届けた。又中学の執行部も同じく義援金を集めた。これら一連の行為は、いずれも自然に無償に働きかけたものでありその態度は、当然のことながら貴重な価値を持っている▼今年は、夏休み前、五十年目の墜落とも言うべき行為がひん発し改めてその根源を問われた。十月には先生方の分科会も結成され、新たに土佐校教育を探る機会を持った。諸々の出来事があった一九七〇年だったが、彼らの行為はその中にあって清涼剤のようである▼後少しで今年も終る。今一度今年をじっくりと振り返ってみたい。（H・O）

入文学服
本町中ノ橋電停前北側　TEL ㉒1776・2744

シートもの、ブックもの……
どんなものでも、５秒間で複写してお渡しします。
書籍・楽譜・講義ノート・教材テキスト・テスト問題

どんなものからでも
電子リコピーでOK！
電子リコピー サービスショップ
山元文具事務機部
高知市梅ノ辻八番十二号
TEL 代表 ㊽3101

はりきる文化各部
学校の冷い態度に悩み

文化祭

薄い生徒の関心

一昨年、職員会議で〝文化祭二年に一回〟が決定された。以前より文化祭をめぐって二年一回案と一年一回案が対立していたが、これで文化祭はほぼ二年に一回に落ち着いた。その結果、今年は文化祭が開催される年になっているが、文化部の意欲的な態度にくらべて、生徒の関心が薄い。また学校側も、「予算は模造紙代ぐらいしか出さない」と冷たい態度をとっている。

校舎建築中や、創立五〇周年記念式典が近く行なわれることなどから文化部の間で、文化祭は行なわれないのではないだろうか、と心配されていたが、二月九、十日の二日間、開催されることになった。

しかし今年は例年以上に生徒の関心が薄い。主な理由は次の三点にあり、一昨年までお生徒の積極的な参加がなく、生徒はただ見物人の役わりしか果たしていない。そのため、毎年、文化部の発表会に終りマンネリが叫ばれている。

①執行部の発足がおくれ、具体的な案がまだ出されていない。

②生徒の多くは文化祭は単に文化部の発表会である。と考えている。

③二年に一回では開催までの期間が長く、生徒の親近感がなくなってしまう。

③に関しては一年二年一回になる時、すでに問題とされていたが、その結果が表われたと見てよい。しかし最大の原因は②にあり、一昨年までお生徒の積極的な参加がなく、生徒はただ見物人の役わりしか果たしていない。そのため、毎年、文化部の発表会に終りマンネリが叫ばれている。

特活部の三枝先生は「文化祭に文化部以外の参加は禁止するのではなく、むしろ歓迎している。またクラスによる展示やステージも良いと思う」と話している。執行部でも文化祭を体育祭同様に全生徒の行事とし、マンネリを打破しようと生徒の参加を募っている。しかし学校側は文化各部に対して

態度をとっている。

校舎建築中や、創立五〇周年記念式典が近く行なわれることなどから文化部の間で、文化祭は行なわれないのではないだろうか、と心配されていたが、二月九、十日の二日間、開催されることになった。

しかし今年は例年以上に生徒の関心が薄い。主な理由は次の三点にあり、

①執行部の発足がおくれ、具体的な案がまだ出されていない。

②生徒の多くは文化祭は単に文化部の発表会である。と考えている。

③二年に一回では開催までの期間が長く、生徒の親近感がなくなってしまう。

③に関しては一年二年一回になる時、すでに問題とされていたが、その結果が表われたと見てよい。しかし最大の原因は②にあり、一昨年までお生徒の積極的な参加がなく、生徒はただ見物人の役わりしか果たしていない。そのため、毎年、文化部の発表会に終りマンネリが叫ばれている。

特活部の三枝先生は「文化祭に文化部以外の参加は禁止するのではなく、むしろ歓迎している。またクラスによる展示やステージも良いと思う」と話している。執行部でも文化祭を体育祭同様に全生徒の行事とし、マンネリを打破しようと生徒の参加を募っている。しかし学校側は文化各部に対して

会場は異様な雰囲気
美術部　中央公民館で展示会

土佐校美術部は十一月五・六日の両日公民館で行なわれ、約二百人の観客を集めた。

会場である公民館の入口には部員の傑作（？）を額に入れ、二十円・三十円の値で売られていた。

ホールの中は薄暗く、作品はライトの光で浮かび上がっている。ビョウを綱の目状に並べたもの、肥料袋に突き刺さったつるはし、天井から太い綱で吊した古バケツなど奇抜な作品ばかり。

さらに、固まりかけたゼラチンの中に入れたりんご、なども。

今回の発表会では、顧問の先生は作品の出品のみにとどまり、配置、準備などすべて生徒の手で行なわれた。そのため部員は、連日十時頃まで〝仕事・仕事〟だったとか。

軟庭・バドミントン
新人戦で優勝

軟式庭球部―十一月二十二日から二日間、高知市営コートほかで行なわれた新人戦で、準決勝で学芸高を2―1に、決勝で追手前高を3―0に破って優勝、個人戦決勝リーグでも、下谷、政光両選手が三戦全勝で優勝した。

陸上部―第十回県リレーカーニバルが十一月二十二日、高知大グラウンドで開かれた。同部は中学の部四百mリレーで島中、杉本、金田、梅下の四選手が四十六秒九の大会新、県中学タイ記録を出して優勝した。

硬式庭球部―土佐校コートほかで十一月二十三日、新人戦が行なわれ、シングルで立田選手がベスト4に進出、またダブルスでも加藤、立田両選手が決勝に進出したが、高知高に2―0で敗れた。

バドミントン部―十一月二十三日県民ホールで秋季選手権大会が開かれ、高校ダブルスで高岡、佐々木両選手が、準決勝で高知商を2―0で、決勝で須崎高を3―1にくだして優勝、中学ダブルス、シングルは土佐同志の決勝戦となったが結局、ダブルスでは島本、美馬両選手がシングルスでは島本選手がそれぞれ優勝した。

柔道部―南国市の市民体育館で十一月二十三日、第三回南国大会が開かれ、同部は団体で三位に入賞。準決勝で、高知商Bに20―7と敗れたが、三位決定戦では高知農を37―0と圧到的にくだした。

なお、今の団体戦レギュラーはほとんど高一なので来年が期待できそう。

なごやかに
〝ガンバルゾ！〟
先生方の懇親会

十一月二十一日土曜日本校で、市内の私立高校の先生方が集まって、懇親会が行なわれた。この会は年一回互いの交流をはかろうと行なわれており、しばらく中断していたが昨年から復活したもの。この日はまず開会式のあと、ソフトボール、バレーボール、囲碁に

カッパ先生
おめでとう

大鳴・長嶋・山中と自称〝三大独身〟の中で一人だけ最後までがんばっておられた生物担当の山中先生が井上純さん（二十五才）と結婚された。挙式は十一月三日、農協会館端光殿で、新婚旅行は伊豆に行かれた。おふたりは半年ほどは複雑な所まで理解してもと前に高知市内のある場所で見合いされて知りあわれたそうである。

「性格は余りよくわからない。美人とは思わないし、料理は普通くらいだと感じました。とにかく気にいったから」とおっしゃる先生。「誠実で清潔そうな人だと感じました」とおっしゃる純さん。どのような家庭をつくっていかれるつもりですか、とお尋ねすると「ごく平凡な家庭が目標」と答えてくださった。結婚式の時に、かえ歌などが紙に書かれてくばられたということを聞いていたので、そのことを質問すると「これはねえ、悪友達（主に山伸間）が面白半分につくってさわいだもの。かえ歌だけでなく、旅行した所や、略歴なんかを書いたものだよ」とおっしゃった。

県立
嶺北高校の巻
学校訪問記

十一月十八日の開校記念日に、本山の県立嶺北高校を訪れた。秋の本山は、霧が多くて肩寒い。校舎に入ると、さっそく校長室に案内されて、教頭の宮地先生にお話をうかがった。

校長先生は、「朝早く起きて、手間ひまかけても、息子一人のために、弁当を作ってやれ」と生徒の母親に要求するのだろうか。

時代は大きく変わっている。日本は、世界有数の〝経済大国〟になった。主婦が朝早く起きて、家族全員の弁当を作るといった習慣はこの日本から、だんだん姿を消しつつある。そこらへんの事情を無視した、あまりにも時代遅れな発想には、まったくビックリさせられる。

以上は、弁当を作る母親の苦労を思って書いたことだけれど、次は、弁当を学校まで持って来て食べる、生徒自身の側から書く。

第一、冷えきった弁当は、うまくない。どんなにうまいビフテキだって、焼きたてで、ジューシーっているうちがうまいので、冷えて堅くなったのは、食べられたものじゃない。寒い冬に冷えきった弁当。これほどみじめなものはない。

第二に、校長先生はご存知ないだろうけれど、毎日持って来るカバン、これの重いこと

食堂休業について
校長先生の常識を疑う

土佐校名物の食堂がしばらくの間、休業になっていた。二十五円うどんの愛好者には、ずいぶん迷惑なことだ。食堂が再開されてからも、いまだに販売量は二百杯のまま。このことの原因には、食堂で働くおばさん達の労働条件の悪さにあるとのうわさを聞いたこともある。が、それは別にして、生徒の立場から、校長先生に、ひとこともふたことも言わせてもらいたいことがある。

校長先生は、「生徒は、学校へ弁当を持って来るのが当然だ。下宿生や、家庭の事情でどうしても弁当を持って来られない生徒のために食堂があるのだ」と考えておられるようだ。私は、校長先生の学校運営者としての常識を疑う。時代の流れを知らない、生徒の心を知らない、校長先生の考え方に失望した。次に具体的に書く。

市内の各高校では、食堂のメニューもぐっと豊富だ。食堂の建物も、ずっと立派で清潔だ。このことは、前号の向陽新聞にも書いてあった。これは、これらの学校が、食堂を「どうしても弁当を持って来られない生徒のためだけにある」とは、決して考えていないことを示すものだと思う。

「父兄が、朝、生徒を学校へ送り出すとき、生徒に弁当を持たすのは、父兄として当然行なうべきことだ」と、校長先生は言われたと聞く。しかし、世の多くのサラリーマンの中で、弁当を持って会社に出かける人が、はたして何人いるだろう。生徒の父親の大部分は弁当を持たずに家を出るのだ。

校長先生は、「朝早く起きて、冷えて堅くなったのは、食べられたものじゃない。寒い冬に冷えきった弁当。これほどみじめなものはない。

第二に、校長先生はご存知ないだろうけれど、毎日持って来るカバン、これの重いこと

スピーカーは
博物館へ？

さて、ある日のある休み時間。なにげなく天井を見つめ、ふし穴を数えていくと、黒板の上にあるものに目がとまった。何だろうか？とよくみるとスピーカーであった。ほこりまみれになって、すみっこに小さくなっているのであると思う。最近は人間が宇宙へも出かけるようになった。そこでは雨でも降った日にや、それこそ泣き出したくなる。

校長先生は、それでも言うのか。

「弁当を持って来い！」

（高二男子）

印象深い富士、小諸
一H　林　俊江

七泊八日の旅行では、たくさんの思い出があります。なかでも印象深かったのは富士の姿でした。しとやかな優しさを持つ表富士、果てしなく続く雄大なそ野―。朝霧高原になびくすすきの穂も、のどかな牛の放牧も、車内に流れた快い風でさえ忘れることのできない思い出です。

藤村ゆかりの地、小諸もなつかしく思います。藤村記念館を後にして松林の中をバスは走りました。小諸が近づくにつれ、胸がはずみました。なだらかな浅間山が北に見えはじめると、どこからかリンゴの香りが漂ってきました。予想どおりです。昔風のつくりの家々と、大きすぎない道、四方を山に囲まれて、静かな町がありました。鉄道を見た時、白い煙を吐きながら蒸気機関車がやってくるように思いました。懐古園にはいると、黒門が目にとまりました。じゃり道を歩いていくと、城址の石垣があり、藤村の詩碑の向こうには、日本アルプスの山々を望むことができました。展望台からは千曲川の流れも見えました。

小諸なる古城のほとり

雲白く　遊子悲しむ

この詩を読み、藤村を知る旅人は誰しも感傷的になるはずだと思いました。

このような修学旅行のもう一つの楽しみは、友達と寝起きをともにして、一週間を過ごすことです。バスの中においても、私達のホームは愉快でした。のど自慢をしたり、ラジオ放送の真似をしたり、大合唱したり。最もうれしかったのは、湯元の演芸大会で優勝したこと。私達のホームは「姿三四郎」を演じました。バスの中でずいぶん楽しませてもらったものまねがこの劇にも出演して、大いにうけました。ラジオ、テレビドラマと同じように宣伝つきでしたが、これがまたたいへんな人気。コカコーラの歌が途中で調子っぱずれになったことも喜ばれました。

書いても書いても、ほんとうに話の種はつきません。今でも丸沼管沼あたりで見た、あの鮮かな紅葉を忘れることはできませんし、軽井沢のリンゴ園で食べた甘いリンゴの味も覚えています。地図を広げれば、確かな感動がよみがえってきます。

演芸大会の迷シーン

世俗の波はここにも
失望した日光

一O　中町　修

今度の旅行で一番印象をうけたのは富士山であり、見事に期待をうらぎられたのは日光であった。日光には大いに失望させられた。僕としては、千年以上の歴史を持つ日本有数の霊場としての日光を期待していたのに、実際に見たのは観光地化され、世俗の垢に染まりきった日光だった。なんと神聖であるはずの東照宮の境内で商売をしていたのだ。

日光で最初に行った輪王寺では坊さんから安置されている仏像の説明なんか聞いていたが、最後にはとうとう「日光大観」という案内書を買わされてしまった。さらに案内のおじさんに連れられて東照宮へ行くと、御神酒などを売っている店の前に行き「これは記念になるから買っておいた方がいい」とか「御利益があるから買え」なんていわれた。これには頭に来た。何が日本有数の霊場だ、天台宗の大本山だ『バカにするな』と何のことはない、大勢で寺院の商売のいいカモになりに行ったようなものだ。こんな気持ちになったのは僕だけではなく、他にもブーブーいっている奴がいた。そこで一言言いたい。

「こんな所なんか旅行のコースから除けてしまえ」そもそも学校これは修学旅行は遊びではなく、社会勉強に行くんだなんていうが、そりゃなにこんなに観光地化した日光なんかより日本の寺院としての姿の方がいいじゃないだろうか、そこんな所をもっと学校に考えてほしい。

奇妙な
外人に…

一T　浜田　幸治

東京へ行ったからには銀座を見ないと話にならないと思って、僕は友達と自由時間を銀座で費す事にしました。朝からの雨はどうにかやんでいたけど、どんより曇っていかにも東京らしい天気に思えました。新宿から地下鉄ですぐに着きました。僕は十年前新宿に住んでいて銀座にも何回か行ったはずですが、思い出はありません。駅を出てまず人が多いのに驚きました。デパートで買物をしたかったので早速通りすがりの一女子高校生に尋ねると〝はきはき〟といかにもあか抜けした調子で正確に丁寧に教えてくれました。やはり違うなあと感心させられ、又落ちついており美人でもあったので、彼女は僕にとって強く印象づけられました。

デパートを出て銀座二丁目あたりまでくると、フーテンみたいな姿の外人が四、五人踊っていました。これが東京の名物かと思って珍しさの余り足をとめて見ていると傍の外人がやって来て、何か訳のわからぬ事を話しかけてきました。どうやら〝一〇〇円の聖書を買えと頼んでいるようです。「これはえらいことになった」と思い、「ノーマニー」と繰り返すと、相手の外人は「ミステイク」を連発。最初の事が理解できませんでしたが〝一〇〇がミスプリで無料であげるという事でした。やっと安心して一冊もらい「サンキュー」といってその外人と別れました。

わずか一時間余りの銀ブラでしたが僕には今まで七日間で最も楽しく過ごせたと思いました。急に愉快な気持になって旅館の帰途につきました。

惜別の涙

一H　山崎　一寛

第一日目の晩、あやしいネオンのホテルに入って驚いたのは女の子の格好である。化粧そしていなかったが、いつも野暮ったい制服を着てる奴等がヘンな格好をしてホテルの中をウロついているのには全く閉口した。

三日目は待望の白樺湖。霧高原にくらべて、ここは何と美しいことか。湖畔の散歩や、しっとりとした白樺の木立ちの中での友との美しい語らいは、遠い未来まで忘れることができないだろう。その晩の男の子の部屋は、失恋したといって泣きわめくもの、嬉しさで寝つかれないものと対照的であった。

湯元での演芸会は五日目の晩で見事、我Hホームは優勝を獲得。これによってクラスのスクラムも一層堅くなった。最後の東京の自由時間では宮庁街をまわった。「縁があったらまたくるぞ！」と外務省の前で誓いを立て、東京を去った。

すべての行程が終わり、土讃本線も山田の駅が近くなった頃に、女の子達がメソメソと泣き始めた。その時、ぼくにはそれがどうした涙であるかわからなかった。しかし帰ってきて、ただ勉強にのみ強いられる機械のような生活の中へ入ってしまった今、それが真に人間を確かめ合うことのできた素晴らしい八日間への惜別の涙であったことがわかった。

懐かしい高知の青空

一T　国吉　幸恵

七泊八日の旅は私には余りに長過ぎた。旅行最後の目的地、東京に着いた時、私はそれまで心に張りつめていた何かが急にほぐれた様な気がした。そしてアメコを歩くうちに気付いたのだが、私は殆ど山や湖ばかりのこの旅行に疲れ果てオーバーだけれど、たまらなく人が恋しかったに違いない。ここには人々の姿があった。日暮近く、夕食の買物に狭い通りをせわしげに歩いて行く、あの人々の姿があった。それは見も知らぬ人ばかりだったけれど、私は言い様の無い親しみを覚え、この人々の中にいる事がとても嬉しかった。人間とは変なものだ。毎日を何事も無く過ごしている時には他人の事など全く目に入らないし、時には他人の存在が却って煩わしくて仕様の無い事もある。それなのに、こうして一週間知らない土地で過ごしてみると、こんなにも人が懐かしくなるものなのだろうか。人は多勢の中にいると、自分をみつめる機会が無いから、それに気付かないでいるけれど、本当はとても心細く、淋しい存在なのだ―そう思った。

東京を後にして、一週間ぶりにまた元来た道を戻る時、私は足元に広がった吉野川の美しさに驚いた。こんな美しさはこの一週間どこでも見なかったと思った。あんなに遠くまで行かなくても高知は十分美しい。こんな真青な空がどこにあるものか……私は高知を離れたくないと思った。畳が恋しかった。家に帰ったら、手足を伸ばしてゆっくりと眠りたい―そう思いながら、それがいつまでも続くことを願っていた。

高知学園
学校訪問記

食堂休業について
校長先生の常識を疑う

土佐校名物の食堂がしばらくの間、休業になっていた。二十五円うどんの愛好者には、ずいぶん迷惑なことだ。食堂が再開されてからも、いまだに販売量は二百杯のまま。このことの原因には、食堂で働くおばさん達の労働条件の悪さにあるとのうわさを聞いたこともある。が、それは別にして、生徒の立場から、校長先生に、ひとこともふたことも言わせてもらいたいことがある。

校長先生は、「生徒は、学校へ弁当を持って来るのが当然だ。下宿生や、家庭の事情でどうしても弁当を持って来られない生徒のために食堂があるのだ」と考えておられるようだ。私は、校長先生の学校運営者としての常識を疑う。時代の流れを知らない、生徒の心を知らない、校長先生の考え方に失望した。次に具体的に書く。

市内の各高校では、食堂のメニューもぐっと豊富だ。食堂の建物も、ずっと立派で清潔だ。このことは、前号の向陽新聞にも書いてあった。これは、これらの学校が、食堂を「どうしても弁当を持って来られない生徒のためだけにある」とは、決して考えていないことを示すものだと思う。

「父兄が、朝、生徒を学校へ送り出すとき、生徒に弁当を持たすのは、父兄として当然行なうべきことだ」と、校長先生は言われたと聞く。しかし、世の多くのサラリーマンの中で、弁当を持って会社に出かける人が、はたして何人いるだろう。生徒の父親の大部分は弁当を持たずに家を出るのだ。

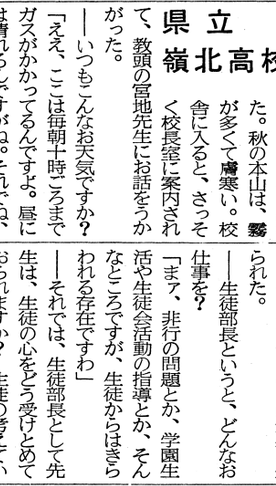
校長先生は、「朝早く起きて、手間ひまかけても、息子一人のために、弁当を作ってやれ」と生徒の母親に要求するのだろうか。

時代は大きく変わっている。日本は、世界有数の〝経済大国〟になった。主婦が朝早く起きて、家族全員の弁当を作るといった習慣はこの日本から、だんだん姿を消しつつある。そこらへんの事情を無視した、あまりにも時代遅れな発想には、まったくビックリさせられる。

以上は、弁当を作る母親の苦労を思って書いたことだけれど、次は、弁当を学校まで持って来て食べる、生徒自身の側から書く。

第一、冷えきった弁当は、うまくない。どんなにうまいビフテキだって、焼きたてで、ジューシーっているうちがうまいので、冷えて堅くなったのは、食べられたものじゃない。寒い冬に冷えきった弁当。これほどみじめなものはない。

第二に、校長先生はご存知ないだろうけれど、毎日持って来るカバン、これの重いこと



県立
嶺北高校の巻
学校訪問記

十一月十八日の開校記念日に、本山の県立嶺北高校を訪れた。秋の本山は、霧が多くて肩寒い。校舎に入ると、さっそく校長室に案内されて、教頭の宮地先生にお話をうかがった。

スピーカーは
博物館へ？

さて、ある日のある休み時間。なにげなく天井を見つめ、ふし穴を数えていくと、黒板の上にあるものに目がとまった。何だろうか？とよくみるとスピーカーであった。ほこりまみれになって、すみっこに小さくなっているのであると思う。最近は人間が宇宙へも出かけるようになった。そこでは雨でも降った日にや、それこそ泣き出したくなる。

校長先生は、それでも言うのか。

「弁当を持って来い！」

（高二男子）

会場は異様な雰囲気
美術部　中央公民館で展示会

土佐校美術部は十一月五・六日の両日公民館で行なわれ、約二百人の観客を集めた。

会場である公民館の入口には部員の傑作（？）を額に入れ、二十円・三十円の値で売られていた。

ホールの中は薄暗く、作品はライトの光で浮かび上がっている。ビョウを綱の目状に並べたもの、肥料袋に突き刺さったつるはし、天井から太い綱で吊した古バケツなど奇抜な作品ばかり。

さらに、固まりかけたゼラチンの中に入れたりんご、なども。

今回の発表会では、顧問の先生は作品の出品のみにとどまり、配置、準備などすべて生徒の手で行なわれた。そのため部員は、連日十時頃まで〝仕事・仕事〟だったとか。

軟庭・バドミントン
新人戦で優勝

軟式庭球部―十一月二十二日から二日間、高知市営コートほかで行なわれた新人戦で、準決勝で学芸高を2―1に、決勝で追手前高を3―0に破って優勝、個人戦決勝リーグでも、下谷、政光両選手が三戦全勝で優勝した。

陸上部―第十回県リレーカーニバルが十一月二十二日、高知大グラウンドで開かれた。同部は中学の部四百mリレーで島中、杉本、金田、梅下の四選手が四十六秒九の大会新、県中学タイ記録を出して優勝した。

硬式庭球部―土佐校コートほかで十一月二十三日、新人戦が行なわれ、シングルで立田選手がベスト4に進出、またダブルスでも加藤、立田両選手が決勝に進出したが、高知高に2―0で敗れた。

バドミントン部―十一月二十三日県民ホールで秋季選手権大会が開かれ、高校ダブルスで高岡、佐々木両選手が、準決勝で高知商を2―0で、決勝で須崎高を3―1にくだして優勝、中学ダブルス、シングルは土佐同志の決勝戦となったが結局、ダブルスでは島本、美馬両選手がシングルスでは島本選手がそれぞれ優勝した。

柔道部―南国市の市民体育館で十一月二十三日、第三回南国大会が開かれ、同部は団体で三位に入賞。準決勝で、高知商Bに20―7と敗れたが、三位決定戦では高知農を37―0と圧到的にくだした。

なお、今の団体戦レギュラーはほとんど高一なので来年が期待できそう。

なごやかに
〝ガンバルゾ！〟
先生方の懇親会

十一月二十一日土曜日本校で、市内の私立高校の先生方が集まって、懇親会が行なわれた。この会は年一回互いの交流をはかろうと行なわれており、しばらく中断していたが昨年から復活したもの。この日はまず開会式のあと、ソフトボール、バレーボール、囲碁に

カッパ先生
おめでとう

大鳴・長嶋・山中と自称〝三大独身〟の中で一人だけ最後までがんばっておられた生物担当の山中先生が井上純さん（二十五才）と結婚された。挙式は十一月三日、農協会館端光殿で、新婚旅行は伊豆に行かれた。おふたりは半年ほどは複雑な所まで理解してもと前に高知市内のある場所で見合いされて知りあわれたそうである。

「性格は余りよくわからない。美人とは思わないし、料理は普通くらいだと感じました。とにかく気にいったから」とおっしゃる先生。「誠実で清潔そうな人だと感じました」とおっしゃる純さん。どのような家庭をつくっていかれるつもりですか、とお尋ねすると「ごく平凡な家庭が目標」と答えてくださった。結婚式の時に、かえ歌などが紙に書かれてくばられたということを聞いていたので、そのことを質問すると「これはねえ、悪友達（主に山伸間）が面白半分につくってさわいだもの。かえ歌だけでなく、旅行した所や、略歴なんかを書いたものだよ」とおっしゃった。

印象深い富士、小諸
一H　林　俊江

七泊八日の旅行では、たくさんの思い出があります。なかでも印象深かったのは富士の姿でした。しとやかな優しさを持つ表富士、果てしなく続く雄大なそ野―。朝霧高原になびくすすきの穂も、のどかな牛の放牧も、車内に流れた快い風でさえ忘れることのできない思い出です。

藤村ゆかりの地、小諸もなつかしく思います。藤村記念館を後にして松林の中をバスは走りました。小諸が近づくにつれ、胸がはずみました。なだらかな浅間山が北に見えはじめると、どこからかリンゴの香りが漂ってきました。予想どおりです。昔風のつくりの家々と、大きすぎない道、四方を山に囲まれて、静かな町がありました。鉄道を見た時、白い煙を吐きながら蒸気機関車がやってくるように思いました。懐古園にはいると、黒門が目にとまりました。じゃり道を歩いていくと、城址の石垣があり、藤村の詩碑の向こうには、日本アルプスの山々を望むことができました。展望台からは千曲川の流れも見えました。

小諸なる古城のほとり

雲白く　遊子悲しむ

この詩を読み、藤村を知る旅人は誰しも感傷的になるはずだと思いました。

このような修学旅行のもう一つの楽しみは、友達と寝起きをともにして、一週間を過ごすことです。バスの中においても、私達のホームは愉快でした。のど自慢をしたり、ラジオ放送の真似をしたり、大合唱したり。最もうれしかったのは、湯元の演芸大会で優勝したこと。私達のホームは「姿三四郎」を演じました。バスの中でずいぶん楽しませてもらったものまねがこの劇にも出演して、大いにうけました。ラジオ、テレビドラマと同じように宣伝つきでしたが、これがまたたいへんな人気。コカコーラの歌が途中で調子っぱずれになったことも喜ばれました。

書いても書いても、ほんとうに話の種はつきません。今でも丸沼管沼あたりで見た、あの鮮かな紅葉を忘れることはできませんし、軽井沢のリンゴ園で食べた甘いリンゴの味も覚えています。地図を広げれば、確かな感動がよみがえってきます。

演芸大会の迷シーン

世俗の波はここにも
失望した日光

一O　中町　修

今度の旅行で一番印象をうけたのは富士山であり、見事に期待をうらぎられたのは日光であった。日光には大いに失望させられた。僕としては、千年以上の歴史を持つ日本有数の霊場としての日光を期待していたのに、実際に見たのは観光地化され、世俗の垢に染まりきった日光だった。なんと神聖であるはずの東照宮の境内で商売をしていたのだ。

日光で最初に行った輪王寺では坊さんから安置されている仏像の説明なんか聞いていたが、最後にはとうとう「日光大観」という案内書を買わされてしまった。さらに案内のおじさんに連れられて東照宮へ行くと、御神酒などを売っている店の前に行き「これは記念になるから買っておいた方がいい」とか「御利益があるから買え」なんていわれた。これには頭に来た。何が日本有数の霊場だ、天台宗の大本山だ『バカにするな』と何のことはない、大勢で寺院の商売のいいカモになりに行ったようなものだ。こんな気持ちになったのは僕だけではなく、他にもブーブーいっている奴がいた。そこで一言言いたい。

「こんな所なんか旅行のコースから除けてしまえ」そもそも学校これは修学旅行は遊びではなく、社会勉強に行くんだなんていうが、そりゃなにこんなに観光地化した日光なんかより日本の寺院としての姿の方がいいじゃないだろうか、そこんな所をもっと学校に考えてほしい。

奇妙な
外人に…

一T　浜田　幸治

東京へ行ったからには銀座を見ないと話にならないと思って、僕は友達と自由時間を銀座で費す事にしました。朝からの雨はどうにかやんでいたけど、どんより曇っていかにも東京らしい天気に思えました。新宿から地下鉄ですぐに着きました。僕は十年前新宿に住んでいて銀座にも何回か行ったはずですが、思い出はありません。駅を出てまず人が多いのに驚きました。デパートで買物をしたかったので早速通りすがりの一女子高校生に尋ねると〝はきはき〟といかにもあか抜けした調子で正確に丁寧に教えてくれました。やはり違うなあと感心させられ、又落ちついており美人でもあったので、彼女は僕にとって強く印象づけられました。

デパートを出て銀座二丁目あたりまでくると、フーテンみたいな姿の外人が四、五人踊っていました。これが東京の名物かと思って珍しさの余り足をとめて見ていると傍の外人がやって来て、何か訳のわからぬ事を話しかけてきました。どうやら〝一〇〇円の聖書を買えと頼んでいるようです。「これはえらいことになった」と思い、「ノーマニー」と繰り返すと、相手の外人は「ミステイク」を連発。最初の事が理解できませんでしたが〝一〇〇がミスプリで無料であげるという事でした。やっと安心して一冊もらい「サンキュー」といってその外人と別れました。

わずか一時間余りの銀ブラでしたが僕には今まで七日間で最も楽しく過ごせたと思いました。急に愉快な気持になって旅館の帰途につきました。

惜別の涙

一H　山崎　一寛

第一日目の晩、あやしいネオンのホテルに入って驚いたのは女の子の格好である。化粧そしていなかったが、いつも野暮ったい制服を着てる奴等がヘンな格好をしてホテルの中をウロついているのには全く閉口した。

三日目は待望の白樺湖。霧高原にくらべて、ここは何と美しいことか。湖畔の散歩や、しっとりとした白樺の木立ちの中での友との美しい語らいは、遠い未来まで忘れることができないだろう。その晩の男の子の部屋は、失恋したといって泣きわめくもの、嬉しさで寝つかれないものと対照的であった。

湯元での演芸会は五日目の晩で見事、我Hホームは優勝を獲得。これによってクラスのスクラムも一層堅くなった。最後の東京の自由時間では宮庁街をまわった。「縁があったらまたくるぞ！」と外務省の前で誓いを立て、東京を去った。

すべての行程が終わり、土讃本線も山田の駅が近くなった頃に、女の子達がメソメソと泣き始めた。その時、ぼくにはそれがどうした涙であるかわからなかった。しかし帰ってきて、ただ勉強にのみ強いられる機械のような生活の中へ入ってしまった今、それが真に人間を確かめ合うことのできた素晴らしい八日間への惜別の涙であったことがわかった。

懐かしい高知の青空

一T　国吉　幸恵

七泊八日の旅は私には余りに長過ぎた。旅行最後の目的地、東京に着いた時、私はそれまで心に張りつめていた何かが急にほぐれた様な気がした。そしてアメコを歩くうちに気付いたのだが、私は殆ど山や湖ばかりのこの旅行に疲れ果てオーバーだけれど、たまらなく人が恋しかったに違いない。ここには人々の姿があった。日暮近く、夕食の買物に狭い通りをせわしげに歩いて行く、あの人々の姿があった。それは見も知らぬ人ばかりだったけれど、私は言い様の無い親しみを覚え、この人々の中にいる事がとても嬉しかった。人間とは変なものだ。毎日を何事も無く過ごしている時には他人の事など全く目に入らないし、時には他人の存在が却って煩わしくて仕様の無い事もある。それなのに、こうして一週間知らない土地で過ごしてみると、こんなにも人が懐かしくなるものなのだろうか。人は多勢の中にいると、自分をみつめる機会が無いから、それに気付かないでいるけれど、本当はとても心細く、淋しい存在なのだ―そう思った。

東京を後にして、一週間ぶりにまた元来た道を戻る時、私は足元に広がった吉野川の美しさに驚いた。こんな美しさはこの一週間どこでも見なかったと思った。あんなに遠くまで行かなくても高知は十分美しい。こんな真青な空がどこにあるものか……私は高知を離れたくないと思った。畳が恋しかった。家に帰ったら、手足を伸ばしてゆっくりと眠りたい―そう思いながら、それがいつまでも続くことを願っていた。

最後の夜

一T　溝淵　玲子

静岡で初めて見つけた富士山、崇高だったナア。河口湖からの富士山もいい。大地の懐に抱かれて居るって気がしたもの。本栖湖の富士山は逆の中に顔出して額縁にはまってる感じだった。何処にでも富士山は居るんだよね。そうそう山が有るっていうんじゃなくて居るの。バスの中で始終友達と、「ネェ富士山は何処行ったの―？おらんなったやか。アレッ後ろにおったおった」なんて言いあったっけ。日本だ、私の祖国だって気がしたもんな。お百姓さんが手を振ってくれたね。長野の林檎は美味しかった。林檎恐怖症になったりして。それにしてもよく歌ったナ。毎朝バスが発車しないうちから音声をあげて。歌った、笑った、泣いた。それが一番印象に残ってる。最後の夜、一頻回顧談に花を咲かせた後、キャンドルサービスをした。手に手にローソクを持って輪になって坐る。暗闇の中を小さな灯が一つ一つ増えてゆく。静かだ。友達の息使いが聞こえる。灯が点される間に一人一人が心の中にある想いを一言ずつ呟いた「さようなら」「友達が欲しい」「いい奴だナ」「楽しかった」「ごめんね」「どうにもならない」様々な言葉が次々と暗闇の中へ消えていったこと、であった。

「たのしかった」
ただそれだけ

一K　横山　正尚

修学旅行の思い出をかくのは誠に難しい。あまりに多くの事がある。五百円札からは到底想像できない近くで見る富士の華麗さ、雄々しさ。車内が騒然となった日光のすばらしい紅葉と湖沼。対照的に霧に包まれ雄大な広野を思わせる戦場ケ原と鬼拇出、華厳の滝、白樺湖……。富士といえば華麗、雄大。何かピリッとしない。いやしすぎである。自然描写の能力に欠ける自分には一つだけとって詳しく書くのはちょっと荷が重い。それじゃ、見方を変えてみようと又摘出してみる。悪のりしすぎて冷たい廊下に座らされた事。男子だけが、男女両風呂借り切ってのはての水のかけ合い。湯元の演芸会。広い東京の空の下、門限に遅れてヒーヒー走った事。こんな事を挙げていると自然と口元がゆるんでくる。これなら前よりおもしろく書けるだろうが、ヤバイ事が出てきて仲間に迷惑がかかってもすまないし、嘘を書くのは良くない。本当に残念である。

結局何もないが免に角、旅行は楽しかった。二ケ月もたった今、まだ頭の中をバスが走っているようだ。このバスはまだなかなか止まりそうにない。秋の夜長、こんな事をかいていると、一層速度をましそうな気がする。試験も近いというのに、ハンドルは大丈夫であろうか……。本当に楽しい七泊八日であった。

友情は夜
ひらく？

一N　吉岡健太郎

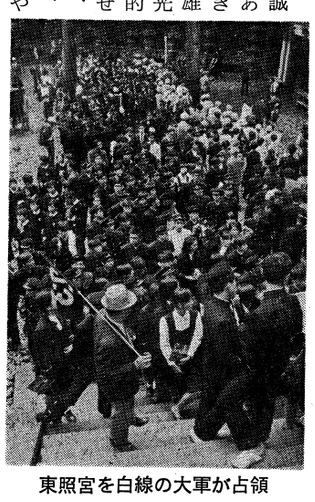
興味ある事は旅行先の寺や湖ではなく「友達との関係がかわる」という事だ。ひっこみじあんで普段は人と殆ど交際しない人が一変してたいへんな社交家になったなんだか、あすからまた土佐校へ登校するのが、とてもいやな事のように思えてきた……。

放課後の森分校。一年前に買ったというオルガンから、ネコフンジャッタのメロディーが聞こえてくる。一年で、やっと曲らしいのがひけるようになったんだそうだ。でも、このオルガンの音、あと数ケ月で二度と聞かれなくなる。生徒減少で、分校経営が困難になった。来年の春、森分校は閉校になる。

彼女も名ギャンブラーだったとか

森分校　生徒は女子だけ七人

のんびりした校風



東照宮を白線の大軍が占領

忘れられない
りんごの味

一K　N・T

そもそもこの私りんごが大好きなのだ。いるいる人に言わせると色気より食い気なんだそうだ。そういう訳で、その前日に明日はりんご狩りがあると分かった時から（いくつ食べられるかなあ。でも、あんまりたくさん食べるとみんなに笑われちゃうし…）と一人で喜んだり困ったりしていたものだ。

さて、りんご園へ行くのに、バスから降りて五分程歩いた。山全体がりんご畑のようだ。山道をあがっていく両側に、黄色いのや青いの、熟れたのやまだ固そうなのやそんなりんごが、どの木にも何十個となっている。

りんご園では五十分程自由時間がとられた。りんごの木はずい分低くから枝がついていたので、まず手近にあるのをとってかりとかむ。消毒もしてあるのだろうがハンカチで一、二度キュッキュッとすって。まだ少し青いりんごだったけど、一口かじったとたんりんごの甘すっぱさが口の中にひろがっていき、それにつれて、顔がほころびていく。

その日の夕食のデザートにもまたりんごが出た。おしまいにはみんなりんごの食べすぎで、もう誰も〝りんご〟なんて聞くのもいやになった。トランプで負けたらりんごを食べるかけもした。かくして、私は身をもって感じた。

「過ぎたるは及ばざるが如し」

それでも私は、アルバムの片隅にはったりんごにかぶりついている写真、あれが一番なつかしいのである。

「愉快だった」修学旅行の思い出

東照宮を白線の大軍が占領